譯注

# 董康『書舶庸譚』九卷本譯注（十）

芳村弘道

書舶庸譚卷九

〔民國二十五年　昭和十一年　丙子歳　一九三六年　九月一日～九月十五日〕

**九月一日**

曇って霧がかかる。海に浮かぶ島々が見分けられない。天候が少し爽やかになる。抱愿（劉抱願）と申保に手紙を出す。午後五時、雷雨。

**二日**

曇って霧がかかる。徐森玉[1]の手紙を受け取る。易州（河北省保定市易県）で新たに發見した北魏皇帝の「東巡碑」〔の拓本〕を送附[2]。『水經注』（巻十一）易水[3]の「御射碑」である。〔書體は〕珍しくて古拙なもので、「爨寶子」に似ている[4]。磨滅裂損して不完全であるけれども、後に釋文を載せた。あわせて『水經注』を補って抄錄し考證の助けとする[5]。小林に手紙を出し、以前からの代理出版の古籍のガラス乾板を調べるように依頼する。

皇帝東巡の碑【陽文、篆額雙行。　碑文は毎行二十六字[6]】

【前に一行裂損】澤歴定翼【以下、二十六字裂損】峘山　北行して歸る。十有二月【以下、九字裂損】崇□の□峙、乃ち駕を路隅に□し、弓を援き而して之を射る。矢は亡□を踰ゆること三百餘□。是に於いて復た左右の將士の射を善くする者に命じ之を射しむ。武衞將軍昌黎公の□□・前將軍浮陽侯の阿齊・中堅將軍藍田侯の代田・積射將軍曲陽侯の□□・射聲校尉武安子の韓亡興・次飛督安熹子の李羔等數百人の若きは、皆天下の□□なり。之を射て崖を過ぐる者有る莫し。或いは峰の傍らに至り、或いは巖の側に及ぶ。是に於いて群臣内外、始めて上の□□の□□□を知り、聖藝の神明に嗟歎す。古に蓬蒙の善を窮むる有りと雖も、之を今に方ぶれば【以下、八字裂損】過。鎮東將軍定州刺史樂浪公【以下、十一字裂損】銘を立て、□廣德美、之を來世に垂れんとす。三年丁丑、功訖はる。會たま樂浪公官を去り、□刺史□東□□張掖公の寶周、初めて臨み、其の事を續讚し、遂に刊して□□に建て、乃ち頌を作りて曰はく、「□皇なる神武、期に應じて挺きんで生まる。含弘寔に大にして、下濟して光明す。□は□せ不

る亡く、□□不□。四海を肅清し、遠きは至り邇きは平らぐ。蕩蕩たり聖なる猷、民□能□。□□□□、〔□〕下咸ごとく寧んず」と。

按ずるに、『水經注』に碑文を引きて云ふ、「皇帝、太延元年（四三五）十二月、車駕東巡し、五迴の險邃を逕て、崇岸の竦峙を覽る。乃ち駕を路側に停め、弓を援きて之を射、矢を飛ばして巖山を踰ゆ。石に刊して用て元功を讚ふ」と。趙一清本（『水經注釋』卷十一）、「巖山」の下に缺文有るを以て、『（太平）寰宇記』の此の碑を引くを補ひて云ふ、「矢を飛ばして巖山を踰ゆること、三百餘步。後、鎮東（正しくは軍）將軍定州刺史樂良公、文を乞ひ、射所に于いて碑を立つ。中山安喜の賈聰書す」と。是れ宋の時に拓本の世に行はるる有り。注と記との引く所に各おの詳略ありと雖も、其の一碑爲ること疑ひ無きなり。惟だ現石に碑を書するの人の姓名無けれども、其の頌詞の後に尚ほ餘石數行有りて、剝蝕して辨ずべからざれば、殆ど磨滅せんか。碑中の人名、『魏書』と參考すべき者、「昌黎公」は元丘爲り。「太武帝紀」延和元年（四三二）八月に見ゆ。「浮陽侯」は卽ち河間公齊、「代田」は姓は豆。『魏書』暨び『北史』に均しく傳有り。但し藍田侯に封ぜらるるの語無し。「張掖公寶周」は卽ち保周にして、禿髮傉檀の子爲り。延和元年に於いて、沮渠蒙遜を棄て魏に奔り、張掖公と爲ること、「太武帝紀」延和元年に見ゆ。太延五年に於いて、爵を進めて王と爲る。

（1）徐森玉（一九八一―一九七一）、名は鴻寶、字の森玉をもって行われる。古籍・古文物の鑑定に秀で、その保存に多大な貢獻を果たしたが、晩年、文化大革命にあらぬ汚名を着せられ生涯を閉じた。當日記の一九三六年時點、故宮博物院古物館館長であった。

（2）この北魏太武帝の「東巡碑」（『水經注』にいう「御射碑」）は、北宋初の『太平寰宇記』の後、石刻資料としての存在が知られなくなった。民國二十四年（一九三五）に至って徐森玉が易州で發見し、拓本を二十枚とって友人に分け與えたとされる（傅振倫「隱而復顯的一千五百五十年前的魏碑」、『文物天地』一九八八年第三期、頁二七による）。徐氏は當時、最新發見の古碑の拓本を日本旅寓中の董康に郵送したのであった。

（3）董康が「易水」というのは誤りで、易水の次の條の「滱水」に訂正すべきである。

（4）「爨寶子」は、東晉の大亨四年（義熙元年、四〇五）に刻せられ、清の乾隆四十三年（一七七八）に雲南省曲靖縣で出土した石碑で、現在、曲靖縣第一中學の碑亭に保存されており、隸書から楷書に向かう過渡的な書體を示していると評される（楊震方『碑帖敍錄』、上海古籍出版社、一九八二年二月、頁二七〇による）。

（5）後掲の「御射碑」に關する『水經注』の引用は、滱水の支流の徐水に關する記事に見える。

（6）「皇帝東巡之碑」の考釋の公刊は、羅振玉『後丁戊稿』（『貞松老人遺稿甲集』、一九四一年所收。のち『羅雪堂先生全集』續編二、文華出版公司、一九六九年、頁四五七―四五九）の「魏太武帝東巡碑跋」があるが、『書舶庸譚』の本條はこれに先んずるものである。また羅振玉「石交錄」卷三に錄文がある（『貞松老人遺稿甲集』、一九四一年所收。のち『羅雪堂先生全集』續編三、文華出版公司、一九六九年、頁九七七・九七八）。「北朝石刻資料選注（一）」（『東方學報　京都』第八十六册、京都大學人文科學研究所、二〇一一年八月、頁三六八―三七四）は全拓の書影を掲載し、釋文・語注などを加えている。後に錄した訓讀文は、これを參考にした。また德泉さち氏に「北魏平城時代の巡行碑」の論文（『書學書道史研究』二十七號、書學書道史學會、二〇一七年一一月）があり、「文成帝南巡碑」と合わせて本碑の「來歷と現狀」や「立碑の背景と意圖」などが論述されている。なお「北朝石刻資料選注」、德泉氏論文ともに『書舶庸譚』の本條に言及しない。本碑の拓影は「京都大學人文科學研究所所藏石刻拓本資料」で閲覽できる（http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/type_a/html/nan0011x.html）。

## 三日

晴れ。田中と武昌の吳仲常の手紙を受け取る。八時五十五分、玉姬

と東京に行く。十一時、驛に到着。田中の令孃の柳子と勝山が出迎え。三越に行き一時閒ほど見て廻る。田中を文求堂に訪ね、彼に靜嘉堂に赴いて沅叔同年（傅增湘）の爲に『翰林珠玉』[1]の缺葉について對校し、內閣文庫では心如（陶洙）の爲に宋本『秦淮海詞』[2]の一葉を對校してもらいたいと依賴する。勝山は先に歸る。政子は休暇をもらって歸省する。また郭沫若[3]および柳子の婿の增井經夫[4]に會う。晝食の後、柳子夫婦と銀座に行き買い物。三時十分の列車で歸る。柳子たちが東京驛まで見送り、精巧な銅畫の贈り物をくれたが、美術品といえるものであった。

（1）『翰林珠玉』は、元の虞集の六卷からなる詩集である。『靜嘉堂文庫宋元版圖錄』（汲古書院、一九九二年四月）は、「圖版篇」頁四七四に書影を載せ、「解題篇」頁一二四（排列番號237）に「新編翰林珠玉　六卷　元虞集撰　元刊　四册」と著錄し、「（卷一卷頭書名の次行に一行刊記）儒學學正孫存吾如山家塾刊」の刊記や淸の黃丕烈の手跋、汪士鐘の遞藏を示す藏書印などを記している。「靜嘉堂文庫所藏　宋元版」マイクロフィルム（丸善雄松堂株式會社J-DAC）によって全文が閲覽できる。傅增湘は家藏の『新編翰林珠玉』（沈增植舊藏）を覆刻して『蜀賢遺書十二種』に收めるに當たり、脫葉を靜嘉堂本で補った（民國二十四年、一九三五に刊刻開始、二十六年、一九三七に完成）。そのことを『藏園群書題記』（上海古籍出版社、一九八九年六月）に「皕宋樓本の今尙ほ日本靜嘉〔堂〕文庫に存するに思ひ及び、適（たまた）ま心如、昨歲、董授經同年に從ひ日本に游び、因りて持ち往き、原書を取りて校正することを屬す。心如、東京に至り、更に之を東友の長澤〔規矩也〕君に託し、缺葉を影寫し以て歸り、幷びに爲に逐卷讎勘すること一過。是に於いて積年の疑滯、之が爲に疏解し、傳本の譌脫咸ごとく補完するを得、中心愉暢するこ累日」（該書頁七九七）と述べる。「心如、昨歲、董授經同年に從ひ日本に游び」というのは、陶洙が民國二十四年（一九三五）の董康訪日に同行したことを指し、その詳細は本書卷八に見える（ただし『新編翰林珠玉』に關する記事はない）。この年の「影寫缺葉」でなお不完全であったので、傅增湘は完善を期するために今回、さらに董康に依賴したと思われる。

（2）內閣文庫所藏の宋本『秦淮海詞』は、本書卷六の十二月二十日條の『淮海集』の『長短句』三卷のことである。

（3）郭沫若は、民國十七年（昭和三年、一九二八）に日本に亡命して後、千葉縣市川市に居住していた。日本寄寓の閒、甲骨文・金文を研究し、昭和七年（一九三二）に『兩周金文辭大系』、昭和十二年（一九三七）に『殷契粹編』を、いずれも田中慶太郎の文求堂から出版している。歸國は本年の翌年、民國二十六年（昭和十二年、一九三七）であった。

（4）增井經夫（明治四十年、一九〇七―平成七年、一九九五）は、東京の人。昭和五年（一九三〇）、東京帝國大學文學部東洋史學科卒業。淸代史の研究者。當時は日本大學講師であった。

**四日**　曇って霧がかかる。孫逸齋と李紫東に手紙を出す。夜になって雨。

題曼殊留視册[1]　曼殊留視册に題す

〔其一〕

傾城顏色照花枝　傾城の顏色　花枝に照（かがや）き
獲偶才人遇亦奇　才人に偶するを獲（え）たるは遇にして亦た奇なり
至竟豐臺[2]留韻事[3]　至竟（しきやう）　豐臺に韻事を留め
小名[4]贏得徧人知　小名　贏（か）ち得たり　徧（あまね）く人の知るを

美人の顏は花咲く枝の下でいっそう輝き、才子に連れ添えたのは滅多にない出會いからであった。最後には豐台に男女の情愛の逸事を傳えのこし、その幼名は誰もが知るほどの名高さを得た。

〔其二〕

繽紛花雨[5]隔凡仙　繽紛たる花雨　凡仙を隔て
夙侍瑤宮[6]媲嬝煙　夙（つと）に瑤宮に侍し嬝煙（でう）に媲（くら）ぶ
寄語檀奴[7]勤撰述　檀奴に寄語す　撰述に勤しみ

休憑錦瑟悵華年[8]　錦瑟に憑りて華年を悵むことを休めよと

降りしきる雨のように亂れ飛ぶ花は俗界と仙界を隔て、すでに仙宮に奉仕する身は恰もなよなよと立ち上る煙を思わせる。あの人にお傳えください。著述に專念なさって、美しい瑟をよすがに華やかな日々を思い出して悲しむことがないようにと。

〔其三〕　〔其の三〕

磨蝎河東劫運經[9]　磨蝎　河東　劫運經

驚鴻一瞥影亭亭[10]　驚鴻　一瞥　影亭亭たり

鑑湖丹旐終歸去[11]　鑑湖の丹旐　終に歸り去り

同是伶俜勝小青[12]　同じく是れ伶俜たるも小青に勝る

韓愈と柳宗元が遠く貶謫されたような厄運を〔毛奇齡〕も經驗した。しなやか姿態の美女の曼殊は〔そのような彼の愛妾となったけれども〕、ほんの僅かな間に死去して遺影が美しく描かれた。鑑湖の側に埋葬されることになり赤い葬儀の旗が掲げられ、ついに歸り去った。孤獨なことでは小青と變わりないが、それ以上のありさまであった。

〔其四〕　〔其の四〕

鴻詞廿輩[13]墨華妍　鴻詞の廿輩　墨華妍し

精衞應知恨可塡[14]　精衞　應に知るべし　恨みの塡むべきを

怪底絳帷稱弟子[15]　怪底しむ　絳帷　弟子と稱すれども

撚脂未寫誄花篇[16]　脂を撚して未だ花に誄する篇を寫せざるを

〔『曼殊留視册』は〕博學鴻詞となった二十人の書跡が美しい。精衞は〔木石で東海を埋められると信じたように〕恨みを解消できると知っていたはずである〔この册子のお蔭で、早逝したことを恨む曼殊の思いも晴れたであろう〕。不思議にも毛奇齡門下の弟子と稱した曼殊にもかかわらず、指に紅を付けたままで落花を悼む一篇が作れずにいたことがあった〔恐らく彼女が落花に自らの死と毛奇齡との別れを感じ取り、筆を執れなかったからであろう〕。

玉京謠[17]　黄孝紓[18]　玉京謠　黄孝紓

彈指[19]龍鸞劫[20]　彈指す　龍鸞の劫

縹緲靈芬[21]　縹緲たる靈芬

百歲流波逝　百歲　流波のごとく逝く

貌取梨渦　貌には梨渦を取り

盈盈[22]明鏡清泚●　盈盈として明鏡は清泚なり

過故苑、花姹[23]銷妍　故苑に過ぎれば　花姹　妍銷え

問幾閱、苕華成世●[24]　幾たび苕華の世に成るを閱するかと問ふ

餘歡墜●　餘歡　墜つ

白頭悽斷　白頭　悽斷す

初晴居士●[25]　初晴居士

春紅雹碎天何意●　春紅　雹のごとく碎くるは　天　何の意ぞ

憶沈吟、伴小窓獺祭●[26]　憶ふ　沈吟して小窓の獺祭に伴ひしことを

金屋[27]成塵　金屋　塵を成し

淒迷蕭夜環珮●[28]　淒迷たり　蕭たる夜の環珮

早賦心、哀滿江南[29]　早に心を賦し　哀しみ江南に滿ち

又細草、花銘[30]多麗●　又た細草　花銘　多く麗し

芳菲思●　芳菲の思ひ

應入玉臺廋史●(31)　　應に玉臺廋史に入るべし

麗しくも悠久なる時閒は一瞬にして過ぎるもので、香氣はおぼろげとなり、百年は流れる波のように去って行く。顔にはえくぼがあり、〔それを映す〕鏡は曇りなく清らか。思い出の花畑を訪ねると花作りの婦人の美貌はなくなっていたが、綺麗な花を世に送り出したことが何度あったかと問うてみた。有り餘る喜びは失われた。悲しみの極みに達したのは白髪頭の人、初晴居士、毛奇齡であった。

春に赤く咲いた花が雹のごとくバラバラに碎かれたのは天のいかなる意圖か。詩句を練っては小聲で吟じ、小窓の下に書籍をずらりと列べた側に付き從っていたことが偲ばれる。美しい屋敷は塵が積もり、侘びしい夜に帶び玉が音を立てたことを思い出し悲しみに沈む。早くより心のうちを賦に作り、江南を哀れむ溢れんばかりの思いを詠ったが、細い若草の閒に落花を埋葬した時の銘文は修辭が豊かであった。彼女の麗しい情感。〔それによって作られた詩文は、〕『玉臺新詠』や『廋史』に收められてよい。

（1）『曼殊留視册（影印本『曼殊留影』）』は、清の毛奇齡が亡き愛妾の張曼殊を偲ぶ自作の「曼殊葬銘」「曼殊別傳」などのほか、諸名家手書の追悼の詩詞を編集した册子。本書卷九・八月二十七日條（本譯注（九）頁九二）を參照。なお『曼殊留視册』は、もと滑川澹如が明治四十二年（一九〇九）に中國に旅行し、蕭山（毛奇齡の故郷）の王宗炎の第九代の後人から購入し、內野家の嗣子となった弟の皎亭に讓ったものである（家藏「殘稿」の澹如箱書きによる）。

（2）「豐臺」は北京市の西南に位置する豐臺區。曼殊の出身地。ここは北京の花商人の花木の栽培地であり、元時代には庭園や亭臺が多くあった。毛奇齡「曼殊別傳」（『曼殊留影』所收、『西河集』卷九十六「曼殊別誌書縛」）に「曼殊は豐臺の賣花翁の女」とある。

（3）「韻事」は風流韻事の略。ここでは風雅の事ではなく、男女の愛情にまつわる事柄の意。

（4）曼殊はもと阿錢といった。曼殊は毛奇齡の友人の陳維崧の名づけによる。彼女が禪に傾倒しているのに因み、佛花を意味するところから命名された。

（5）「花雨」は、說法に贊嘆して諸天が雨のように降らす花をいう佛教語であるが、ここでは仙界の落花に用いたものと解した。

（6）「瑤宮」は、美しい玉を用いた宮殿で、仙界の宮殿の意。南齊の袁彖「遊仙詩」に「羽客宴瑤宮、旌蓋乍舒設（羽客　瑤宮に宴し、旌蓋　乍ち舒設す）」とある。

（7）「檀奴」は、女性が夫や戀人に向け馴れ親しんで用いる呼び名。檀郎に同じ。

（8）「錦瑟悵華年」は、一說に亡き妻を悼む「悼亡詩」と解釋する唐の李商隱「錦瑟」の「錦瑟無端五十絃、一絃一柱思華年（錦瑟　端無くも五十絃、一絃一柱　華年を思ふ）」という句に基づき、毛奇齡が身まかった曼殊との麗しい過去を思い出して悲しんだという意。ここには董康の柳綺卿（前月二十八日條の「貞慧夫人」）への追慕の情が祕められていよう。「錦」は美しい裝飾をいい、「瑟」は二十五絃の箏。

（9）「磨蝎」は、星宿の十二宮のひとつ「磨蝎宮」の略。星占いでは、身、命この星の下にあれば挫折や苦難に見舞われるとされた。宋の蘇軾『東坡志』卷一に「退之の詩（唐の韓愈「三星行」）に云ふ、「我生まるるの辰、月　直斗に宿る」と。乃ち知る退之は磨蝎を身宮と爲し、而して僕は乃ち磨蝎を以て命と爲す。平生多く謗譽を得るは殆ど是れ同病なり」とあり、ここでは「磨蝎」に韓愈を喩えた。「河東」は現山西省の地名、ここが唐の柳宗元の祖籍であったので、彼を河東先生と稱することがある。「劫運」は災難、厄運。罪を受けて韓愈は潮州（廣東省）、柳宗元は永州（湖南省）・柳州（廣西省）に左遷され、毛奇齡は若い頃に仇敵からの難を避け山東・河南・湖北などを流轉した（清の施潤章『施愚山集』卷「毛子傳」）。三者のこうした經驗を「劫運」といった。

（10）「驚鴻」は、魏の曹植「洛神賦」に「翩たること驚鴻の若し」とあって、驚き飛び去る鴻雁の輕やかさをいうが、轉じてしなやかな姿態をもつ美女やかつて愛した女性を指す。「一瞥」は極めて短い時閒。曼殊は十八歲で毛奇齡（當時、五十九歲）の愛妾となり、二十四歲で死去した（毛奇齡「曼殊葬銘」、『曼殊留影』また『西河集』卷九十六所收）。「亭亭」はすらりとした美女のようす。「亭亭玉立」という語がある。

（11）「鑑湖丹旐」は越地に曼殊が埋葬されることをいう。「鑑湖」は浙江省

紹興市にある湖の名。「丹旌」は丹旌に同じ、葬儀に用い、死者の官職や名前を白書した赤い旗。曼殊は毛奇齡の故郷の蕭山（浙江省蕭山市、紹興の北）に埋葬された（毛奇齡「曼殊葬銘」）。蕭山と鑑湖は地理上、離れているが、同じく古の越の地に屬したので、鑑湖をもって埋葬の地を表した。王三傑の「曼殊發紹詞五首」其三に「丹旌東指す越王の城」とある。「終歸去」は、曼殊の埋葬先が生まれ故郷の北京ではなく、將來の陪葬を見込んで蕭山となり、結局、行き着くべき場所に向かったことをいう。「曼殊葬銘」に「初、予將に曼殊を豐臺の張氏の阡（墓地）に葬らんとするに、黄門の任君、予に謂ひて曰はく、生きて相離るるに忍びざるに、死して之を棄つ、と。予曰はく、然り、と。遂に櫝（ひつぎ）を攜へ蕭山に歸し、將に予を藏するの地に附せんとす」とある。王三傑の「曼殊發紹詞五首」其一に「故鄉　三尺の土を戀はず、郎に從ひ歸り去り平生に訂す（生前の約束通りとなった）」とある。

（12）「伶傳」は孤獨のさま。「小青」は若い侍女をいう。「白蛇傳」の白娘娘の侍女の名として知られる。

（13）「鴻詞廿輩」は、『曼殊留視册』に收められた詩詞の作者が約二十名（詩詞の作者は十九名、前の序・題額、後の跋の作者を入れると二十三名）おり、そのうち六名が博學鴻詞に擧げられていることによる措辭。詳細は本譯注（九）參照。

（14）「精衞應知恨可塡」は、炎帝の娘が東海で溺れて精衞という鳥に化し、常に西山の木石を取って來ては東海を埋めようとしたという神話による（『山海經』北山經）。

（15）「怪底」は俗語で、怪しみ疑う意。「絳帷稱弟子」は曼殊が毛奇齡の門弟でもあったことをいう。「曼殊別傳」に「曼殊既に歸（とつ）ぎ、摯（贄、入門時に持參するお禮の品）を執りて從學せんことを願ふ。書を取りて觀れば悟才有り、筆を把（とる）りては卽ち能く畫字す。其の字は每（つね）に予に類（にた）て、見る者輒ち予の假りて之を爲すと謂（おもう）ふ」とある。「絳帷」は赤い帳帷。後漢の大儒の馬融が常に高堂に坐し、赤い帳を張って弟子に敎授した故事（『後漢書』馬融傳）から、講義の場、門下を「絳帷（絳帳）」という。

（16）「誄花篇」は落花に捧げる哀悼の文。「誄」は死者を祭るのに用い、その生前の事跡を述べ、哀悼の意を表す韻文の一體。

（17）「玉京謠」は、雙調九十七字、前段は四十九字十句五仄韻、後段は四十八字九句六仄韻からなる詞。本作は、前掲の董康詩と同じく、「曼殊留視册」に題するものである。

（18）黄孝紓は、字は公渚。本譯注（七）五月四日條に名字を取り違え、公渚を名、字を孝紓としたことを、ここに訂正する。董康は彼の『匊厂（きゅうかん）文稿』に序を撰している。

（19）「彈指」は佛敎語で、指をはじく閒の極めて短い時閒をいう。『首楞嚴義疏注經』（ぎそちゅうきょう）に「唯だ空寂を以て、滅盡を修むれば、身心乃ち能く百千劫を度（わた）ること、猶ほ指を彈くが如し」とある。

（20）「龍鸞劫」の「龍鸞」は、龍と鳳凰のことであるが、優美なものを喩える。才子の毛奇齡と佳人の曼殊についていうので、「龍鸞」の美稱を用いた。「劫」は、計り知れないほどの長い時閒をいう佛敎語。

（21）「靈芬」は香氣。曼殊についていう。

（22）「盈盈」は、淸らかで透き通るようなさま。

（23）「花姥」は、花を栽培する婦人をいう花姑と同義と思われる。南宋の吳文英『夢窗乙藁』の「漢宮春」詞に「花姥來時、帶天香國艷、羞掩名姝（花姥來る時、天香國艷を帶び、名姝を羞ぢ掩ふ）」と見える。詞序に「尹梅津の兪園の牡丹を賦するに追和す」とあって、この吳詞は牡丹を詠じた作であり、「天香國艷（「天香國色」と同義で牡丹を指す）を帶ぶ」というので、「花姥」は牡丹作りの婦人と解釋できよう。

（24）「苕華」は、もと美玉の名（『竹書紀年』卷上）、後に美貌德性を備えた女性をいう。ここでは「花姥」の育てた美しい花の意に解した。

（25）「初晴居士」は毛奇齡のこと。彼は原名、また別號を「初晴」と稱した。

（26）「獺祭」は、かわうそ（獺祭魚）。かわうそは、捕った魚を水邊に陳列する習性があるとされ、これに因んで詩文を作る際、典故を求めるために多くの書籍を列ねることを「獺祭」という。毛奇齡が詩文の制作において、これを行ったことは淸の梁紹壬『兩般秋雨盦隨筆』卷二「毛西河」に次のように見える。「西河先生凡そ詩文を作るに、必ず先に書を羅ね前に滿たし、考核精細にして、始めて紙を伸ばし疾書す。其の夫人の陳氏、先生に妾の曼殊有るを以て、心嘗（かつて）に妒恨し、輒ち諸弟子の前に詈（ののしり）て曰はく、君等、毛大可を以て博學と爲すか。渠（かれ）七言八句を作るも亦た獺祭を須（まち）て乃ち成る、と。先生曰はく、凡そ筆を動かすこと一次に、卷を展ずること一回なれば、則ち典故は終身忘れず。日に積み月に累ね、自然博洽す。後生小子、幸（なまじい）はくは仿（ならい）ひて之を行はんことを。婦の言は聽くこと勿れ、と」。

（27）「金屋」は華麗な屋敷。漢の武帝が少年の頃にお氣に入りの阿嬌を妻に迎え、「金屋」を作って圍っておきたいと言った故事（『漢武故事』）に基づき、妻や妾を迎え入れることを「金屋貯嬌」という。ここの「金屋」は、この語を意識しており、曼殊と暮らした家をいう。

（28）「環珮」は女性が腰につける玉飾り、また美女を指す。環佩ともいう。

（29）「早賦心、哀滿江南」は、北周の庾信「哀江南賦」に基づく句。なお黄孝紓は若き日に庾信の賦に倣った「哀時命賦」を作り評判を呼んだ。

(30)「花銘」は「瘞花銘」に同じ。花すなわち美女の埋葬に作る墓誌銘。
(31)「玉臺匯史」は陳の徐陵編『玉臺新詠』と清の王桐初編『匯史』。前者は艶冶な詩歌を收錄した選集、後者は女性を主題とした內容を諸書から抄錄した類書。

## 五日

晴れ。勝山の東京からの電話があり、色々とこまごまとした用事があるため熱海に來れないと知った。小林が『九宮正始』を郵送してくれ、屆いた。本書は私が昔、震澤の王氏から購入したもので、以前、これによって『南曲韻目』を編輯したことがある【刊刻して『曲苑』に入れた】。丙寅（民國十五年、一九二六）、喧噪を避けて京都に滯在し、これを內藤湖南に贈呈した。[1] 卷中に元・明の人の傳奇が引用され、二百餘種の多きに至り、どれも全く傳本がない。手許に目錄を一部遺しておき、愼芳（董康の妹）に渡して保管させた。上海に戻ってから、くまなく探したが見つからなかった。[2] 今回、小林に賴んで借り出してもらった。後に錄しておく。夜になって大雨。もともと今日は東京の龍名館に移るつもりであったが、政子が實家に歸ったため、中止した。

『彙纂元譜南曲九宮正始』不分卷

※以下の錄文には、原本である大谷大學博物館所藏本（マイクロフィルム閱覽）と比校し譌脫は〔　〕をもって補い、（　）で注記を加えた。なお【　】は原注。

舊鈔本。雲閒（上海市松江區）の徐子（原本みな「子」に作るが「于」が正しい）室（名は迎慶）輯。茂苑（江蘇省蘇州市）の鈕少雅（名は格）訂。前に松陵（蘇州市吳江區）の馮旭【順治辛丑（十八年、一六六一）】、武塘の吳亮〔中〕【順治九年（一六五二）】、水方の姚思【丙申（順治十年）】の諸序有り。次に「臆論」四則【精選　嚴別　定碑（原本「排」）名歸宿　正字句的當】、「凡例」十三則【論備格　論定韻　論審音　論用字　論增減　論句讀　論核實　論減（原本「檢」）訛　論定（原本「訂」）正　論引證　論尋眞　論闕疑　論襯字】。凡そ黃鍾宮、正宮・大石調【正宮と合わせて一冊】、仙呂宮、中呂宮、南呂宮、商調、越調、仙呂入雙調に分け八冊と爲す。又た十三調二冊。十三調とは、黃鍾（原本「鐘」）調、〔正呂調〕、大石調、中呂調、南宮調、商調、越調【一冊】、雙調、羽調、道宮調、般涉調、小石調【以上の各調は慢（原本「慢」）詞、近詞に分かつ】、商黃調【曲無し】、高平調、不知宮調【一冊】。不知商（當に「宮」に作るべし）調を除いての外、適に其の數に合ふなり。各調、左に平上去を注し、右に朱筆を用ひ板（拍板の略）を點す。俱に元明の諸傳奇及び散套を採り、竝びに其の得失を訂正す。閒ま唐の骷髏格を附すは、他の譜の未だ見ざる所と爲す。末は芍溪[3]老人（鈕格）の序と爲す【序・目・格は後に錄す】。

〔鈕格序〕

凡そ事の成る、運數の之を主張するに有らざる莫し。其の遲きの日に當りて、其の速きに迫るを得ず。速きの日は、其の遲きに更むるを得ず。豈に人力の能く造る所ならんや。請ふ今日の荊山徒に泣くを論ずる毋れ、良璧は誰か知らん。[4] 卽ち此より前の者の閱歷は、益ます幾艱辛にして今日に至るを知らざるなり。予、少くして巴人（俗曲。宋玉「對楚王問」の「下里巴人」による）の好を抱き、長じては白雪

（高雅な曲。「對楚王問」の「陽春白雪」による）の傳に逢ふ。弱冠の時、婁東（江蘇省太倉市）に魏良輔なる者有ると聞く。「海鹽」「四平」等の腔（曲調）を厭鄙し、自ら新聲を製し、腔は水磨を用ひ、拍は冷板（冷板橈。清唱。舞台衣裳を着けず歌唱する素唱い）を捱け、一字を度する毎に幾ど一刻を盡くす。飛鳥は之が爲に徘徊し、壯士は之を聞きて悲泣し、當代に雅稱せらる。余特に之に往くに、何ぞ期せん良輔已に故したるとは。余の生まるると彼の相去るとを計るに已に久しく、訪ねて衣鉢（原本「拂」）の授を聞けば、則ち張氏五雲先生有り。字は銘盤、萬曆丁丑（五年、一五七七）の進士にして、北京都水司郎中・加贈奉政大夫なり。然れども今は林下に閒居す。余卽ち刺を具へ奉謁し、幸ひにして卽ち榻を下す（賓客の待遇を受け寄宿する）こと數旬、且つ又た情投意愜（雙方の氣持ちがぴったりと合う）すれども、意はざりき適たま河梁（離別）の恨みの促すこと有らんとは。幸ひにして別れに臨んで、余の同里の芍溪の吳公を以て相い薦めらる。芍溪は、廼ち先生の意を得たるの上首なり。余歸りて卽ち刺を具へ之に謁するに、幸ひに亦た拒む無し。余仍ほ五雲の禮を以て之に事へ、彼も亦た五雲の道を以て（原本「以」字無し）我を敎ふ。彼此相得たること、先後三年。何ぞ意はん彩雲散じ易く、芍溪驀に逝く。悲しいかな。歲餘を越え、意はざりき幸ひに復た小泉の任翁、懷仙の張老を識らんとは。然して此の二公も亦た皆良輔の派なり。賴ひに其の晨夕の研磨、繼ぐに歲月を以てし、但し魏君の室に入ること能はずと雖も、而れども亦た循循乎として魏君の堂に登る。然りと雖も余は本より薄劣の鄙夫、何ぞ薦紳先生の相愛を承けんや。時に醉月の邀へ有り、登山の約絶えず。筐篚もて道に載せ、命を奉じ奔馳し、武陵・黃海・荊溪・魏塘の招きに遇ふを致し、共に延べ及ぶこと二十載。是に至りて長卿（一時、放浪の日を送った漢の司馬相如）游び倦み、馬齒（齡）衰へを加へ、思ひて窮廬に掩息せんと欲す。何ぞ期（原本「其」）せん本里に又た鄭・郭・徐三宅の相愛に値はんとは。又た延及すること九年、此の時將に耳順（六十歲）ならんとす。神疲れ力倦み、敢へて苦しみ却つて門を杜づるを致し、香を焚き佛に禮し、日びに受業の諸公の惠みに感じ、時に疑信の詞の源を窮む。然りと雖も、但し向來、仙呂宮の「渡江雲」、南呂宮の「寄生子」、又た中呂宮の「滿庭芳」有り、自來、考（原本「攷」）訂する所無し。且つ蔣・沈の二譜も皆然り、諸先師も亦た久しく心に礫する（原文「久礫於心」、後文に「久懷瓦礫於心」とあるのと同義であろう）を致す。豈に意はんや、近日、天の其の然るを賜はり、今、敢へて試みに其の源を下に備へんとは。適たま一日、余、友を東鄉に訪ね、返棹の途中、驀に狂風驟雨に値ひ、舟人も亦た爲に驚怖し、忙しく卽ち舟を艤し岸に依る。遙かに竹扉の下に一老翁侍するを見る。古貌皤髯、故識に似たり。近づくを俟ち卽ち僕を遣りて相邀へしめ、余卽ち命に應じ奉揖す。卽ち邀へて一室に至れば、明窗淨（原本「靜」）几、潔然愛す可し。問ひて姓字に及べば、僅かに王姓と言ふのみにして、其の字を言はず。茶畢はり、復た邀へて內に至らんとし、余は再三之を却くるも、彼は卽ち手を攜へ偕に行く。數步ならずして、卽ち朱闌曲徑、媚柳喬松有り、池魚は水に戲れ、林鳥は相鳴き、一洞天に似たり。復た手を攜へ堂に登れば、古玩奇書多きを見、觸目愛す可し。童を呼び復た茗畢はり、余卽ち手を架上に

信し、書一帙を檢す。外に錦袱有りて函を包み、之を啓けば簿面の上に「皇帝萬歳萬萬歳」の七字有るを見、余卽ち手を束ねて敢へて之を啓かず、其の源を叩（原本「扣」）懇す（訊ねて教えを求める）。彼曰はく、「此の書は乃ち漢の武帝及び唐の玄宗の曲譜なり。凡そ今の詞調は多く上古の樂府より來源し、然れども今の此の書の致は式有りて文無き者多し。上古、名づけて骷髏格と曰ふ。漢に至り易へて蛤蟆貫と爲す。後、唐の玄宗其の雅ならざるを鄙しみ、易へて歌樓格と作す。又た輿詞（原本「詞輿」）と曰ひ、又た詞林、說統と曰ふ。今の歌謳腔板は滑稽摩擬、十二紅鳥、飛鳴擧動の態に始まり、流傳して今に至る者なり」と。余、爲に將た信じ將た疑ひ、堅く其の展視を懇求す。幸ひに卽ち之を啓けば、果たして式有りて文無き者多く、或いは式文俱に備ふる者は什に二三なり。但だ幸ひに此の「渡江雲」及び「寄生子」「滿庭芳」「漁父」、第一等の調は文式俱に備はり、勝へざるの喜びなり。隨ひて卽ち此を錄し歸るを告げ、貧人の寶を獲たるに似たるなり。久しく瓦礫を心に懷くるも、余は始めて之を釋く。但し余は久しく從來疑信の詞を以て彙めて一集と成し以て參考（原本「攷」）を俟たんと欲するを戀ふも、博敎する所無きを慮るに因りて、故に屢しば之を止めんと欲す。意はざりき半載の後、適たま雲閒の子室徐公の相招くこと有り。徐公は、字子室、諱慶卿、乃ち嘉靖朝の宰輔の文貞公（徐階）の曾孫なり。風流蘊籍、酷だ音律を好む。嘗て曰はく、「我が明三百年、無限の文人才子あるも、惜しむらくは一人の先人の藩奧を創る者無し。且つ蔣沈二公も亦た多く坊本に從ひて曲譜を創成し、爾の後學の考訂する所無きを致す」と。是に於いて遍く海内の遺書を訪ね、適たま元人の『九宮十三調詞譜』一集に遇ふ。宮に依り調を按じ、規律嚴明。得意の極み、時に手より釋かず。時に天啓乙丑歳（五年、一六二五）なり。又た載餘を越え、豈に意はんや復た明初の選詞一部を得んとは。名を『樂府群珠』と曰ひ、亦た皆調を按じ宮に依り、多く元譜と相似たり。意ひて輯めて一部と爲さんと欲するも、猶ほ一人の見る所限り有らんことを恐れ、欲すれども復た止む。客と之を議するに、客卽ち欣然として、余の驀に漢唐古譜の源を識ると道ふ。彼卽ち案を拍ち驚き羨み、隨ひて卽ち叩（原本「扣」）謁すれば、故知に似たり。情投じ意密し、時刻も離れず。日びに共に搜羅（探し集め）剔抉し（良くないものを除き）、垢を刮り光を磨き、且つ復た漢唐古譜の源を以て、其の體（原本「躰」）に從ひて增入し、輯めて一部と成す。計ふるに十二炎霜を歷て、稿を易ふること七遍、而れども猶ほ未だ愜はず。意はざりき丙子（崇禎九年、一六三六）上巳（三月三日）に至り、昊天憫まず、子室遂に溘焉朝露（急死する）、亦た痛ましからずや。易簀（臨終）の時に當り、是の書を以て泣きて余に付し、余も亦た大慟して之を領す。敢へて夙夜（日夜）皇皇として（不安な心で）其の託する所を終はらざらんや。但し此の時亦た七旬の外（七十歳を過ぎ）、耳目半ば昏く、悲憤猶ほ然れども、垂髫（幼兒）の攻苦（刻苦勉勵）に減ぜず。歷て壬午（崇禎十五年、一六四二）の菊月（九月）に至り、始めて脫稿するを得たり。然りと雖も但だ心猶ほ未だ愜はず。一日、適たま天雨に値ひ、復た啓き之を味はふに（じっくり見ると）、然れども其の閒の瑕玷（缺點）、果たして全く妥なる無く、慚羞して地無く、且つ徐公の託に負くを恨むなり。寧ろ死すとも

必ず再び啓かんと欲すれども、豈に意はんや世變はり人荒ばんとは。亦た痛ましからずや。苦捱して（辛抱して）干戈（戰亂）の稍や息むに至る。時に大清の順治己丑（六年、一六四九。原本「乙」に誤る）七夕の後、方めて復た堅心苦志し、寢食俱に忘れ、毎事復た意に介せず、歴て辛卯（順治八年）清和（四月）に至り、始めて筆を辭するを得。幸ひに此れ仍ほ徐公の陰祐に賴り、毫も舛訛有るを致さざるなり。計ふるに前後共に二十四年を歴て、稿を易ふること九次にして、方に始めて之を成す。余其の年八十有八なり。直ちに風中の燭に似るなり。ああ、子室の去る何ぞ其れ早き。古譜の遇、何ぞ其れ遲き。知音好學、何ぞ其れ少なき。人を譏り己を羨むこと、何ぞ多き。是に於いて天數然るなり。悲しいかな。（原本空四行）大清順治辛卯（八年）清和の望（十五日）後、芍溪老人識す。

元傳奇目【一百二十九種】

宣和遺事【亦た明に作る】　拜月亭　蔡伯喈　許盻盻（正しくは「盼盼」）　薛方卿　王十朋　孟月樓　殺狗記　趙氏孤兒　鮑宣少君　柳耆卿　西廂記　錦香亭　李寶　瓦窰記　劉智遠　留鞋記　宋子京　西窗記　鬼子揭鉢　鄭信　楚昭王　詐妮子　寶裝亭　牆頭馬上　樂昌公主　磨勒盜紅綃　賽樂昌　吳舜英　卓文君　陳巡檢　王煥　鄭孔目　李玉梅　唐伯亨　東窗事犯　賽金蓮　風流合三十　楊寔　孟姜女　鬼法師　張協　司馬相如　劉文龍　詩酒紅梨花　王魁　呂星哥　李勉　王仙客　王質　王祥　劉盻盻　雷世際　薛雲卿　曹伯明　祝英臺　韓壽　蘇小卿　耿文遠【亦た明に作る】朱買臣　張瓊蓮　高漢卿【亦た明に作る】王陵　岳陽樓　裴文俊　京娘怨　翫燈時　甄文素　朱心心　甄皇后　陶學士　王子高　蟠桃會　崔護　陳叔文　羅惜惜　趙光普　玉清庵　磨刀諫父　呂蒙正　張資　馮魁　看錢奴　張浩　崔懐寶　章柳臺【亦た芙蓉仙に作る】　賽金蓮（重出）　琵琶記　高漢臣　李亞仙　浣紗女　趙彦　方蓮英　木綿庵　王允　錦機亭　孫元寶　琵琶亭　溫太眞　朱夫人　郭華　李婉　鬼做媒　張希　魔合羅【雜劇】　杜鵑啼【雜劇】　追韓信【雜劇】　韓翊（正しくは「翊」）　貂蟬女　蔣蘭英　薛包　雙漸　子父夢欒城驛　蔡均仲　王瑩玉　林招得　蔣愛蓮　洪和尚　琵琶怨　賽東牆　燕子樓　董秀才　何推官　風月亭　朱文　韓彩雲　梅竹姻緣　史弘肇　張文擧

明傳奇目【六十種】

紫香囊　寶劍記　浙江亭　四節記　陳光蕊　蘇武　鄒知縣　明珠記　千金記　尋親記　黄孝子　高文擧　崔君瑞　蝴蝶夢　凍蘇秦　綱常記　金印記　元永和　託妻寄子　綵樓記　周子隆　雙忠記　張員外　張子房　繡襦記　還帶記　牧羊記　子母冤家　八義記　十孝記　張翠蓮　西廂記　織錦迴文　蘇倜倜　焚香記　三元記　卧冰記　昇鸞記　竊符記　羅囊記　韓玉箏　鑿井記　精忠記　商輅　金華娘子　躍鯉記　玄皇帝　釵釧記　香囊記　張金花　還魂記　繡鞋記　玉環記　荊釵記【王十朋の改本】　浣紗記　劉孝女　鸞釵記　龍泉記　綈袍記　減竈記　骷髏格

緱山月　錦庭樂　素帶兒　昇平樂　外軍旗【俱に正宮】　光光乍　卜算子　醉落魄　黄梅雨【俱に仙呂調】　滿庭芳　怨東君【俱に中呂宮】　虞美人【南呂宮】　比目魚　水中梭　多姣兒　四般宜【俱に越調】　紅林檎【雙調】　秋夜雨【黄鐘調】　聲聲慢【仙呂調】　新荷花　綠芙蓉

金菊花　金桂枝　山花黄　金閒玉　蜜林檎　清河水　載西施　恨薄情
三軍旗　中軍旗　馬蹄鎗【俱に宮調を知らず】

（1）『九宮正始』すなわち後文に擧げる『彙纂元譜南曲九宮正始』を内藤湖南に贈呈したことは本書卷四下・民國十六年四月二十八日條に見える。この本は後に内藤湖南から神田喜一郎博士に歸し、現在は大谷大學博物館に所藏される。神田博士の『鬯盦藏曲志』（神田喜一郎、昭和五八年一〇月）下册に「彙纂元譜南曲九宮正始不分卷　明徐迎慶撰鈕少雅訂　清抄本　十册」と著錄され、解題・書影が附されている。解題の一節に「蠟牋をもって裝した美しい精抄本で、董康氏、内藤湖南博士の舊藏に係り、外套の題簽は博士の自筆である。尚ほ卷首に「明善堂覽書畫印記」の印記があり、清朝の宗室奕繪の舊藏本であることが知られる」とあり、本書卷四の四月二十八日條についても言及されている。また『神田鬯盦博士寄贈圖書善本書影』（大谷大學圖書館、昭和六三年一〇月）にも著錄、書影が頁九〇・九一、解題が頁八九―九三に掲載されている。なお『彙纂元譜南曲九宮正始』は、民國二十五年に戲曲文獻流通會による影印本があるが、二〇〇六年に廣西師範大學出版社より『日本所藏稀見中國戲曲文獻叢刊』の一として東京大學總合圖書館所藏清鈔本が影印され、黄仕忠氏の解題に神田本に關して考察が加えられている。

（2）本書卷四下・四月二十八日條にも「曩時曾錄一目、未識夾置何處（曩時、曾て一目を錄するも、未だ何處に夾置せしかを識らず）」といっている。

（3）「芍溪」の「芍」は各本（原本も含め）同じであるが、これは「芀」字の形近の誤りで、「芀」は「苕」に同じ（以下の「芍溪」みな同樣）。すなわち苕溪は、湖州（舊名は呉興。浙江省湖州市）の別名。

（4）春秋の楚の卞和は玉璞を見出し王に獻上したが、石と見なされ足切りの罪を受け、荊山で璞を抱いて三日三晩、泣き明かした（『新序』雜事五。『韓非子』和氏は楚山とする）。この故事を用い、才能有る人物は却って不遇であることをいう。

（5）明の蔣孝の『舊編南九宮譜』と沈璟の『增訂南九宮曲譜』をいう。

## 六日

晴れ。五時半、窓を開けて眺めると、魚見崎のかなたの東北方向が果てしなく廣がり、海中に一本筋が出現し、こちら側は波紋が重なり靴のようで、向こう側は波が平らで鏡のように見える。海潮が岸に當って引き返し、かなり行ったところで消え、朝日が一海里ほど昇って、光が斜めに海面に射し、この奇觀を呈したのであろう。劉抱願の手紙を受け取る。政子が歸ってきた。

念奴嬌(1)　旅邸

海天縱目　海天　目を縱（ほしいまま）にすれば
又斜陽隱隱　又た斜陽は隱隱として
簷牙紅矬●(2)　簷牙（えん）　紅く矬（みじか）し
一樣凌波傳軼事(3)　一樣の凌波　軼事を傳へ

【相模灣爲日本童男寵姬橘媛踏海處、古稱吾妻國(4)（相模灣は日本童男（やまとをぐな）の寵姬の橘媛の海を踏む處と爲し、古へ吾妻國と稱す）】

應有驚鴻影墮●　應に驚鴻の影の墮つること有るべし
舸逐鴟夷(5)　舸（ふね）は鴟夷（しい）　逐ひ
藥尋徐市(6)　藥は徐市（じょふつ）　尋ね
浪跡今番我●　浪跡　今番は我なり
楸枰歷劫(7)　楸枰（しうへい）の歷劫（りやくかふ）
勝負評他遮麽●　勝負　評他するも遮麽（いかん）
自笑四壁(8)長年　自ら笑ふ　四壁　長年
生涯蟫蠹(9)　生涯は　蟫蠹（たんと）
難療文園渴●(10)【叶上】　療（いや）し難し　文園の渴【叶上（上に叶ふ）】

倚徧闌干頻絮語　闌干に倚徧し絮語頻りなるも
知否鸚哥暗邏●　知るや否や鸚哥（いんこ）の暗邏するを
韈韈塵微(11)　韈韈　塵微かに
釵低霧濕　釵低（た）れて霧濕ひ
消受心兒可●(12)　心兒を消受すること可なるか
新涼乍到　新涼乍（たちま）ち到り
篝燈重理清課●　篝燈　重ねて清課を理む

念奴嬌　旅館にて

水平線の彼方を眺めやれば、夕陽に照らされた景色がぼんやりと霞んで見え、軒先が赤く短く反り上がっている。〔相模灣の海中に身を投げた橘媛は洛水の女神と〕同様に波しぶきを被った逸話を傳え【相模灣は日本武尊の寵姫の橘媛が海に飛び込み自殺した場所であり、古くは吾妻の國といった】、さぞかし急に飛び立つ鴻のような姿が海に落ち込んだことであろう。鴟夷子皮は船を馳せ、徐市は仙藥を求めたが、今度は私が漫遊の航海をした。戰爭は災厄をもたらすもので、勝ち負けを評論したとて何の意味があろう。

長年の貧乏で、古籍の收藏に生涯を送り、司馬相如が患った消渴を治癒し難く過ごしていることに自嘲の笑いが起こる。欄干のあちらこちらに凭れて途切れずに小聲で話し込んだが、鸚哥が人知れず見回わる探偵のように聽いていたのを知りませんか。〔長い時間が經って、あなたの〕靴下の折り目に少し塵が附き、簪が低く傾き夜霧に髮が潤い、氣持ちをこらえていたのであろうか。秋ぐちの涼しさが急に訪れ、燈火をともして日課とする清雅な文事を再び行う。

（1）本作の「念奴嬌」は、雙調百字、前段四十九字十句四仄韻、後段五十一字十句四仄韻からなる詞であり、「念奴嬌」の詞牌で定格とされる形式をとる。王君南と朱慧の各整理本が變格（蘇軾の「赤壁懷古」の作例が有名）に従い句讀するのは誤り。

（2）「簷牙」は牙のように反り上がった軒先。「矬」の原義は身長が短いことをいうが、ここで單に短い意。なお「矬」の韻は平聲八戈であり、清の戈載『詞林正韻』では第九部に屬す。以下の韻字は、「墮」「我」「麽」「邏」「可」が上聲、「渴」が入聲（ただし原注「叶上」と示されるごとく上聲に通叶する）、「課」は去聲であり、いずれも第九部に屬す。詞の押韻では同部の平仄韻は、往々、通叶することがあり、この「矬」は上聲韻に通叶している。

（3）「一樣凌波……」の二句。「一樣」は、複數の事物が同樣であること。洛神と橘媛とがともに水波と關連する逸話を後世に傳えたことをいう。「凌波」「驚鴻」は魏の曹植「洛神賦」（『文選』卷一九）にいう洛水の神女の動作と姿態の形容であり、「波を凌いで微步すれば、羅韈　塵を生ず」、「翩として驚く鴻（ひしくい）の若く、婉として游龍の若し」とある。

（4）「相模灣……」の原注は、本書卷八・四月二十四日條の「游仙詩」其四の末句の原注に詳しい。

（5）「鴟夷」は春秋の越の范蠡。彼は越王句踐を輔佐し會稽の恥を雪がしめた後、「鴟夷子皮」と改名して舟に乘り國を出て海に浮かんだ（『史記』越王句踐世家・貨殖列傳）。ここでは董康が日本に渡ったことをいったもの。

（6）「徐市」は秦の方士。徐福ともいう。彼は始皇帝の命を受け、東海の蓬萊などの三神山に不死の仙藥を求めに航海した（『史記』封禪書）。蓬萊は日本とする傳説があり、董康が徐市に自らを喩えた。

（7）「楸枰」は、ひさぎ製の碁盤。本書卷七・一月十七日條の「因登諏訪山誤舟投宿平野屋」詩の其二「勝負楸枰閲昔今」の注參照。「歴劫」は佛教語で、世界が完成し破壞される間の測り難いほどの極めて長い時間を經過することをいい、また樣々な災厄に見舞われることを指す。「楸枰歴劫」は、本書卷五・十一月八日條の「木蘭花慢」詞の「棋劫」と同義、戰爭による災厄をいう。清末・民國の動亂を暗に意味する。

（8）「四壁」は、前漢の司馬相如と卓文君が貧しい一時期を送り、家の中には四方に壁が立っているだけであったという故事（『史記』司馬相如傳）。この故事に基づき、貧乏生活をいう。

（9）「生涯蟫蠹」は、董康が生涯を古籍の收藏に費やしてきたことをいう。「蟫蠹」は書籍を食う蟲、しみ。本書卷八下・五月十二日條の「京都寄田中」詩に文求堂書店主の田中慶太郎について、「蟫蠹の舊生涯」という句がある。

(10)「文園渇」は司馬相如が消渇（今の糖尿病）を患っていたことをいう。「文園」は司馬相如が孝文園の令になったことに因む彼の別稱。『史記』司馬相如傳に「常に消渇の疾有り。卓氏と婚し、財に饒かなり。其の進みて仕宦し、未だ嘗て公卿國家に與るの事有らず、病と稱して閒居し、官爵を慕はず」とあり、後世、相如の消渇は、文人が仕途の失意によって閑居したり、病氣や貧窮に苦しんだりすることをいう故事として用いられたが、ここでは董康が實際に糖尿病を持病としていたことをいったものであろう。

(11)「韈韉塵微」の「韈」は靴下、襪、韈に同じ。「韉」は馬の鞍の下に敷く敷物、鞦に同じ。「韈」と「韉」は結びつかない。「韉」は綫（線）の誤字ではなかろうか。襪綫は靴下を折り曲げた線を意味する。「韈韉（綫）塵微」は曹植「洛神賦」の「羅韈、塵生ず」を意識した措辭で、玉姫についていう。

(12)「可」は推測の語氣を表し、「是否」と同義と解釋した。本來、句頭に置かれるべきであるが、押韻の關係で句末に移された。

## 七日

八時頃、玉姫とともに東京に向かう。十一時、驛に到着、勝山夫婦出迎え。連れ立ち文求堂に行き田中と會い、勝山たちは別れ去る。田中が私らを案内し服部時計店に行き、玉姫のためにダイヤモンドをあしらったプラチナの指輪を買い、續いて三越で買い物し、その七階で晝食をとる。地下鐵に乘り淺草に出かけたが、途中の設備はイギリス・フランスよりもずっと行き屆いている。降りてから車を拾って淺草觀音、隅田川堤、吾妻橋などを見物。またも文求堂に立ち寄って少し腰を落ち着け、三時半の鈍行列車に乗って熱海に戻る。連日、異常な暑さで、全く耐えきれない。

## 八日

〔孫〕逸齋の手紙二通、小林一通を受け取り、兩方にすぐ返信し、また沈駿聲に手紙を一通送ったが、黄公渚が原稿料を求めて來たためであった。夕方、玉姫を伴い海岸を散歩すると、ざぶんという波の音が約十秒に一度起こって、波しぶきが衣服にかかりそうになった。邊りが暮色に包まれ、山々に雲氣が立ち籠め、ぞおっとして長くは居られない趣があった。部屋に歸ると體じゅうに汗が流れ、夜は寢られなかった。

## 九日

午後、十二時二十一分の列車に乗り京都に向かう。ここでの滯在が二十日近くになり、潮騷と山容が殊のほか氣に入った。一旦離れ去るとなると、また大變に戀しくなる。旅館の主人の内田勇次が紈（ぬめ）を出してきて揮毫を乞うたので、阿倍仲麿の「明州に至り月を望みて悵懷する」の和歌を七言絶句に漢譯したものを書き與えた。内田みずからが見送ってくれて別れる。七時二十分餘りに京都に到着、小林と長男の長文が出迎え、別莊に宿泊。小林は言うには、このところ攝氏の溫度計で三十五、六度、華氏では九十度以上で、五十年このかた無かった暑さとのこと。この日、申保に手紙を出す。

擬仲麿望月悵懷　　仲麿の月を望みて悵懷するに擬す

岩嶢閶闔渺無垠　　岩嶢（てうげう）たる閶闔　渺として垠（かぎり）無し
幾度思歸可當眞　　幾度の思歸か當に眞なる可き
惟有銀蟾能解事[1]　　惟だ銀蟾の能く事を解する有るのみ
遙升三笠夜窺人　　遙かに三笠に升（のぼ）り　夜　人を窺ふ

阿倍仲麿の月を望んで悲しむ歌に擬擬する

高だかと天の門は聳え建ち夜空は果てしなく廣がる。何度も歸國を思ったが、本當になるのだろうか。銀色に耀く月だけがそのことを知っている。遙か遠く三笠山に指し出で夜に人を窺う。

附仲麿傳【『大日本史』を譯す[2]】

阿部仲麿【麿、一に滿に作る】なる者は、中務大輔船守の子なり。性、聰敏、讀書を好み、從八位上に敍せらる。靈龜二年（開元四年、七一六）、選ばれて遣唐留學生と爲る。時に年十六。唐に往き留學し、博識の名を成し、名姓を易へ朝衡と曰ふ。玄宗帝、左補闕を授け、儀王の友と爲す【『古今集鈔』に曰はく、唐朝、仲麿、姓は朝、名は衡、字は仲と。未だ孰れが是なるかを知らず。且つ唐人の王維等の贈詩は、朝或いは晁に作る。又た『文苑英華』の包佶の「日本國聘賀使晁臣卿の東歸するを送る」詩、『李白集』は日本晁卿、晁、鼂通ず。臣卿は蓋し仲麿の字ならん】。祕書校書に遷り、後に祕書監兼衞尉卿に至る。勝寶中、遣唐大使藤原清河至り、唐の玄宗、仲麿に命じ之に接せしむ。清河還るに及び、仲麿、與に歸らんと欲し、玄宗、因りて之に命じ使と爲さしめ、乃ち詩を賦して曰はく、命を銜み將に國を辭せんとす。非才　侍臣を忝くす。天中　明主を戀ひ、海外　慈親を憶ふ。伏奏して金闕に違れ、駢驂　玉津を去る。蓬萊　鄉路遠く、若木　故園の隣。西望　恩を懷ふ日、東歸　義に感ずる辰。平生　一寶劍、結交の人に留贈す、と。尚書右丞の王維、詩及び序を爲り行くを送り、包佶、趙驊等皆な贈るに詩を以てす。既に明州に至り唐人に別れ、仲麿、月を望み悵然として和歌を詠じ、漢語に寫し以て之を示せば、衆皆な感歎す。海上、風に遇ひ、漂泊して安南に至る。唐人以爲へらく仲麿溺死すと。翰林供奉李白詩を作り之を哭す。仲麿、清河と復た唐に至り、肅宗、擢でて左散騎常侍、安南都護と爲す。光祿大夫御史中丞兼開國公、食邑三千戸に至る。寶龜元年正月（大曆五年、七七〇）卒す。年、七十。代宗、潞州大都督を贈る。仲麿、嘗て書を作り新羅の宿衞王子の金隱居に託し鄉親に寄す。新羅の使の金初正、其の書を持ち至る。仲麿、唐に在ること凡そ五十餘年、身は榮ゆと雖も、然れども歸思多く、鄉國に言及すれば、未だ嘗て悽惻たらずんばあらず。寶龜十年、勅して曰はく、前の學生の阿部朝臣仲麿、唐に在りて亡じ、故家單乏。葬祭に闕くること有り。其に東絁百疋、白綿三百屯を賜へよ、と。承和三年（八三六）、遣唐使に因りて、命じて正二位を贈らしむ。

（1）「銀蟾」は白く耀く月にいる蟾蜍（ひきがえる）のこと。また月を指す。古くは月中にはがいると信じられたことから、月の別名に用いる。
（2）この「仲麿傳」は『大日本史』巻一一六の阿部仲麻呂の傳文を修改したもの。

## 十日

晴れたり曇ったり。午後、玉姫らと小林寫眞製版所に行き寫眞を撮り、彼の母堂に挨拶してから歸る。清水山に登り、觀音殿に參拜し、山傳いに一周遊覽する。洛東の名勝はこの山が最も規模が大きいと言われている。往年、東山に寓居の主人となり、よく子供達を連れてここに來て登眺したものであった。今の高い欄干や傑出した足組は舊觀を變えていない。自分の世渡りを顧みれば、幾度も世變を體驗している。階段を下り、一陶器店で休憩。玉姫が茶器を數點買う。寺町の太

〔大〕島書店に行く。主人は私との舊交があったが、すでに死去して何年も經っていた。[1] 本棚には私が出版した精妙な書籍がまだ殘っていた。續いて細川書店で古書を四種購入して戻る。

嘉靖二十三年進士登科錄一册[2]

首は玉音、卽ち是の年三月初九日の聖旨。讀卷官は、嚴嵩・許讚・毛伯溫・王杲・費寀・熊浹・聞淵・甘爲霖・鄭紳・戴金の凡そ十人と爲す。竝びに提調官の張璧等、監試官の閻鄰等、受卷官の楊維傑等、彌封官の王楨等、掌卷官の李璣等、巡綽官の陳寅等、供給官の高澄等の各銜名あり。嚴世蕃は彌封官の列に在り。恩榮の次第を次にす。殿試より、傳制、唱名、張黃榜、賜宴、賜袍服、謝恩、至詣廟、釋菜、立石、題名、各おの紀すに月日を以てす。次は卽ち題名錄。第一甲三名、進士及第を賜はる。狀元は秦雷鳴、榜眼は瞿景淳、探花は吳情。第二甲九十三名、進士出身を賜はり、徐鉉以下と爲す。第三甲は二百一十六名、同進士出身を賜はり、曹三陽以下と爲す。各人、貫籍、治經、字行、誕日、三代兄弟履歷を敍す。女系は惟だ母、妻の姓氏を詳らかにし、重慶下、俱慶下、嚴侍下、慈侍下、永感下の五類に分かつ。竝びに鄕、會試の名次に及ぶ。次に制策及び一甲三人の對策。淸の制と異なる無し。是の科の我が鄕の二甲は蔣孝と爲す【第七十四名】。三甲は葉材【第十一名】、金九成【第二十七名、兄の九齡と同科】、金九齡【第一百零六名】、吳嶽【第一百二十五名】の凡そ五人と爲す。

元諸名公詩[3]

明の潘是仁の輯。元の部分を存す。元初の十六家は、元好問『遺山集』十卷、趙孟頫『松雪集』七卷、劉因『靜脩集』三卷、陳孚『笏齋集』六卷、貫雲石『酸齋集』二卷、鮮于樞『困學齋集』二卷、吳澄『草廬集』六卷、盧〔盧〕亙『含雪集』三卷、馬祖常『西如集』三卷、范梈『錦江集』二卷、楊載『蒲城集』四卷、虞集『邵庵集』七卷、揭傒斯『秋宜集』五卷、王士熙『陌庵集』二卷、薛漢『象峰集』二卷、溫淸珙『石屋禪師山居集』六卷と爲す。元末の十八家は、薩都剌『天錫集』八卷、張雨『外史集』六卷、陳旅『荔溪集』二卷、貢性之『南湖集』八卷、倪瓚『雲林集』六卷、楊維楨『鐵崖古樂府』十二卷【卷七は七言律詩と爲す】、泰不花『顧北集』一卷【七言律詩】、〔丁〕鶴年『松谷集』二卷、傅若金『玉樓集』四卷、柳貫『初陽集』三卷、張翥『蛻庵集』四卷、李孝光『五峰集』二卷、餘闕『竹窓集』二卷、貢師泰『玩齋集』三卷、陸景龍『湖峰集』一卷、成廷珪『柳莊集』四卷、廼賢『前岡集』三卷、鄭允端『春傭軒集』一卷と爲す。[4] 元初と元末、各おの爵里を以て首に弁す。目を按ずるに、元初に黃溍・戴表元・王沂・黃淸老・歐陽玄の五家を缺く。又た是仁敍は僅かに元・薩の二首を存するのみにして、疑ふらくは脫葉有らん。余、舊宋の部分を藏す。此を得て完璧と稱す。

金陵瑣事四卷續六卷[5]

明の周暉の撰。前に萬曆庚戌（三十八年、一六一〇）五日の焦竑の序有り。

吹景集十四卷[6]

崇禎本。烏程（浙江省湖州市）の董斯・張遐周の撰。前に韓昌箕・凌義渠の序有り。次に目錄。古書の疑義に於いて箋正する所多し。凌序に云ふ、其の穿插架置の妙、昔人の創物の如し。遊戲の小道と雖も、

必ず微に造りて後已む。深き者は之をして淺からしむる能はざるなり。又た層岩邃壑を瞰るが如し。一拳一勺、人跡交はる罕にして、草木禽魚、盡く靈氣を挾む。靜なる者は之をして喧からしむる能はず、精なる者は之をして雜たらしむる能はざるなり、と。以て作者の旨趣を窺見す可し。

（1）「太島書店」は彙文堂、「太」は大の誤り。創業者は文求堂出身の大島友直で、大正十一年（一九二二）に死去。董康來訪時の店の所在は寺町丸太町下る西側で、友直の弟の五郎が繼承していた（『出版文化の源流　京都書肆變遷史』、京都府書店商業組合、一九九四年一一月、頁五〇・五一參照）。

（2）この『登科錄』は版本である。臺北の國家圖書館には四册が所藏され、『明代登科錄彙編』（臺灣學生書局、一九六九）に影印されている。また天一閣の所藏本が『天一閣藏明代科擧錄選刊　登科錄』（寧波出版社、二〇一六年五月）に點校が施され收載されている。

（3）本書は、『靜嘉堂文庫漢籍分類目錄』（靜嘉堂文庫、昭和五年一二月）頁八一六において「彙定宋元名公詩集　二五六卷　明潘是仁編　明萬曆刊」と著錄されるものである。また『京都大學人文科學研究所漢籍目錄』（縮刷版、財團法人人文科學研究協會、昭和五六年一二月）頁五八四・五に書名を「宋元名公詩集」とし、「萬曆四十三年刊本」として著錄されている。この他に內閣文庫や東洋文庫の藏本もある。

（4）『京都大學人文科學研究所漢籍目錄』、『改訂內閣文庫漢籍分類目錄』（內閣文庫、昭和四六年三月、頁四二三）によれば、なおも龍從雲『魚軒詩集』二卷がある。董康は遺漏に氣附かなかったようである。

（5）『金陵瑣事』は、『改訂內閣文庫漢籍分類目錄』頁一三一に「金陵瑣事四卷續二卷二續二卷　明周暉撰　何湛之等校　明萬曆三八序刊」として著錄される。北京文學古籍刊行社の一九五五年の萬曆版影印本を著錄する『京都大學人文科學研究所漢籍目錄』頁二〇三も「續二卷二續二卷」とする。董康が「續六卷」と記すのは「續四卷」の誤り。

（6）本書崇禎版の日本國內における收藏は、『改訂內閣文庫漢籍分類目錄』頁二七〇と『靜嘉堂文庫漢籍分類目錄』頁五三九の著錄を通して知られる（いずれも子部雜家雜說に分類）。また本書は『適園叢書』本のほか、『續修四庫全書』本（第一〇三四册所收）もある。

## 十一日

晴れ。十時、文化會（東方文化研究所）に行き、狩野（狩野直喜）博士を訪ねる。また倉石（倉石武四郎）、吉川（吉川幸次郎）二君に會う。『四庫提要（續修四庫提要）』の整理の體例について討論する。狩野が、敦煌の古寫本及び佛典、明末の章回小說はことごとく網羅して中に入れることを主張する者がいると話す。私の意見、「敦煌の卷子はみな斷簡殘篇であり、かつ多くは四部と重出しており、わずかに異同があるにすぎない。これは曾慥の『類說』に倣って、一つの書にまとめて雜家部の雜纂類に配列すべきである。佛典の目錄については、唐以來、『開元釋教錄』『貞元釋教錄』などの目錄および『宋藏』本があり世に單行している。目錄・歷史・音義などの選入すべきものを除いた外は、關係づけて混入すべきではない。また歷代の勅を奉じて撰せられた書目では、『（四庫）提要』だけが空前絶後である。章回小說は淫らで穢らわしく、怪奇的で、でたらめなものが多いので、乾隆の舊例を亂すのはよろしくなかろう」。それから直ぐにお別れする。

午後二時、小林が私達を案內し嵐山を遊覽。大悲閣下の北側、數十步先の茶店で少し休憩する。高く張った枝が陽を蔽い、蟬が秋に騷がしく鳴く。數日の閒の不快な暑さがこれで急に解消された。それから玉姬と一緒に大丸に行き買い物。小林が招待してくれて六階で西洋料理を食べる。晚八時、狩野が倉石とともに訪問。話がはずんで大變に樂しかった。（狩野は）舊作二首を披露したが、その中に「莫向瀛臺

尋往事、光宣朝士已無多（瀛臺に向ひて往事を尋ぬること莫れ、光宣の朝士　已に多きこと無し）[1]」という句があった。格別の感慨があったことであろう。私は、あなたは以前、蘇州で隣の家に住もうと約束されたが、いつ實行するのですか、と問うた。彼は、前清にはまだ平和の思想があったが、今は人の心にいばらが生えてしまった、と答えた。また漢學と宋學の區別を討論し、私と暗合することが多かった。夜更けに達してようやく別れた。この日、古屋旅館の主人から青島の黄公渚の手紙が轉送される。劉幼雲（劉廷琛）の『燉煌卷子目』が附け足されていた。佳品を選んで後ろに記錄を留める。[2]

燉煌卷子目錄

六朝

悲華經卷第四【高弼、亡妻元聖威の爲に寫す。長さ二丈四尺六寸、高さ七寸五分】

大方廣佛華嚴經卷第三十六【比丘道祥供養。長さ二丈五尺、高さ七寸五分】

師質子摩豆羅世筲（ち）【長さ五尺二寸、高さ七寸五分】

華嚴經卷第八【北魏延昌二年（五一三）、令狐禮太寫す。長さ四尺、高さ七寸四分】

隋

仁王經【隋開皇二十年（六〇〇）、茹長愁の寫經。長さ九尺、高さ七寸三分】

唐

佛頂尊勝陁羅尼經【昆王、姐の爲に寫す。長さ九尺三寸、高さ七寸五分】

金光明經卷第三【唐乾寧九載[3]の寫經。長さ一丈五尺、高さ七寸五分】

妙法蓮華經卷第十八【沙門法瓊禮す。完全にして長さ二丈二尺八寸、高さ七寸五分】

佛說大公經一卷【唐開元五年（七一七）、昭武校尉上柱國令狐若弼寫す。長さ四尺五寸、高さ八寸】

金剛經一卷【唐天祐二年（九〇五）寫す。長さ一丈四尺、高さ三寸八分】

又一卷【唐調露元年（六七九）、陰仁協の寫經。長さ九尺、高さ七寸八分】

又一卷【唐儀鳳元年（六七六）、劉弘珪寫す。長さ一丈二尺、高さ七寸四分】

又一卷【唐永隆元年（六八〇）、陰仁協の寫經。長さ一丈九尺六寸、高さ七寸八分】

又一卷【唐咸亨五年（六七四）、申待徵の寫經。長さ一丈二尺七寸、高さ七寸八分】

又一卷【唐咸淳〔亨[4]〕四年（六七三）、由吾巨言寫す。長さ七尺五寸、高さ七寸三分】

唐寫本駢文【問對二十六條。長さ一丈零六寸、高さ八寸三分】

阿毗曇毗婆娑卷第五十一【唐龍翔[5]〔朔〕二年（六六二）、尉遲（うつち）寶琳寫す。長さ一丈四尺一寸、高さ七寸三分】

觀世音三昧經【唐永淳四年[6]、鄧弘禮寫す。長さ一丈零四寸、高さ七寸二分】

摩訶衍經卷第四十八【比邱善慧所寫。長さ二丈二尺六寸五分、高さ七寸一分】

新譯藥〔師〕琉璃光七佛本願功德景〔經〕[7]卷下【唐景龍元年（七〇七）、杜元禮寫す。長さ一丈六尺八寸五分、高さ七寸四分】

狩野博士枉過夜譚摭拾譚屑步先生送某生游北京韻[8]

狩野博士、枉過せられて夜譚し、譚屑を摭拾（せきしゅう）し、先生の某生の北京に游ぶを送る韻に步す

〔其一〕　〔其の一〕

相逢各訊近如何　相逢ひて各おの近ごろ如何と訊ぬ
換日琴書[9]等逝波　換日琴書　逝く波に等し
廣武紛爭今楚漢[10]　廣武の紛爭　今の楚漢
平安永占好山河　平安　永く占む　好き山河

【京都卽古之平安府、帶礪山河、又稱山城國（京都は卽ち古の平安府、帶礪の山河もて、又た山城國と稱す）】

明時彈事[11]曾聽漏　明時の彈事　曾て聽漏し

【談西曹掌故、先生以爲聞所未聞[12]（西曹の掌故を談じ、先生以て未だ聞かざる所を聞くと爲す）】

垂老投荒[13]愧枕戈[14]　垂老の投荒　枕戈に愧づ
試溯長安徵國故　試に長安に溯り國故を徵すれば
金輪[15]偉略亦無多　金輪の偉略　亦た多きこと無し

【舊唐書、長安三年、朝臣眞人來貢。則天宴之於麟德殿、授司膳卿、放還[16]（舊唐書、長安三年、朝臣眞人來貢し、則天、之を麟德殿に宴し、司膳卿を授け、放還す）】

相會してお互いに近況を訊ねたところ、雙方共に彈琴讀書で日々を過ごして恰も去り行く波のように時が流れるとのことであった。中國では廣武山で楚と漢が戰ったことが今も繰り返されているが、日本の京都は永遠に麗しい山河を保っている【京都は昔の平安京であり、帶や砥石のような細い川となだらかな山があることで、また山城の國と稱す】。狩野先生は平和な時代の彈劾の事情を以前に聞く機會を失った〔のが惜しまれる〕とのことであるが【刑部の故實を話したところ、先生は今まで聞いたことがないことを聞いたとされた】、老い行く時に遠く旅した私は、兵器を枕にして國に報いようとする人に慙愧の念をもつ。試しに唐の長安時代に溯って〔中國と日本の〕國家としての大きな事件を探求すると、金輪聖神皇帝の號をもつ則天武后の偉大な施策は他に多くの事例のないことであった【『舊唐書』に、長安三年（七〇三）、朝臣〔粟田〕眞人が來貢し、則天武后が彼を麟德殿での宴でもてなして司膳卿を授け、歸國させた、とある】。

〔其二〕　〔其の二〕

長年禿管伴疏檠[17]　長年の禿管　疏檠に伴ひ
敢託乘桴慨不行[18]　敢へて桴（いかだ）に乘るに託せんとし行はれざるを慨く
潁洞[19]世情難底柱[20]　潁洞たる世情　底柱し難し
高搴風義話班荊[21]　高く風義を搴（あ）げ班荊を話す
毘陵[22]部落張吾銳　毘陵の部落　吾が銳を張り

【天下名士有部落、龔定盦常州高材篇句也[23]。因先生尊崇陽湖派[24]、故及之（天下の名士　部落有りとは、龔定盦の常州高材篇の句なり。先生、陽湖派を尊崇するに因りて、故に之に及ぶ）】

虎觀[25]師承有孰京　虎觀の師承　孰か京いなる有る

【先生專精公羊[26]、其弟子倉石吉川皆能得其心傳（先生、專ら公羊に精しく、其の弟子の倉石・吉川は皆能く其の心傳を得）】

誠志春秋崇聘問　誠に春秋を志し聘問を崇くすれば

會看瀛海共銷兵　會ず看ん　瀛海　共に兵銷ゆるを

わびしく照らす燈火の側で使い古した筆を長年執ってきたが、自分の理想とする道が行われないことを嘆いて桴に乘り海に出ようとした孔子の心境にこと寄せ〔て日本への旅を行っ〕た。動揺激しい世情は支えることが困難で、今は情誼を篤くもって友人〔の狩野先生〕と座談に時を過ごす。私は天下の名士を輩出した毘陵の集落に生まれたお蔭で吾が才能を誇ることができるが【「天下の名士　部落有り」とは、龔定盦の「常州高材篇」の詩句である。狩野先生が陽湖派を尊崇されるのでこのことに言及した】、白虎觀で講論が行われたような先生の一門では誰が優れているであろうか【先生は公羊學を專門として精通し、その弟子の倉石（倉石武四郎）・吉川（吉川幸次郎）はいずれも先生の學問をよく繼承している】。『春秋』の說くところを忠實に守って國と國との交流を重んずれば、必ず蓬瀛の海での〔中國と日本との〕戰爭はなくなるであろう。

（1）この二句は、『君山詩草』（昭和三十五年八月）の「送岡崎學士遊支那」二首のうち其の一の尾聯である。『君山詩草』では前句が「休向瀛臺訪遺事（瀛臺に向ひて遺事を訪ぬるを休めよ）」に改められている。なお「岡崎學士」は東洋史學者の岡崎文夫である。彼は大正八年（一九一九）八月から三年間、中國に留學した（『東方學』第七〇輯所收「先學を語る―岡崎文夫博士―」、一九八五年七月、「岡崎文夫博士略歷」による）。この詩はその送別の作であるので、「舊作」といった。後注（8）參照。

（2）劉廷琛の『燉煌卷子目錄』については、高田時雄氏「日藏燉煌遺書の來源と眞僞問題」（『敦煌寫本研究年報』第九號、二〇一五年三月）の「六、劉廷琛舊藏寫本のこと」（該誌頁一四―一七）に詳述されており、董康のこの日記に言及されているだけでなく、董康が羽田亨に宛てた書翰も紹介されている。

（3）「乾寧」は唐の昭宗の年號（八九四―八九八）であるが、五年（八月に光化と改元）までであるので、「九」は誤り。

（4）「咸淳」は南宋の年號であるので、「淳」は形の近い亨の誤り、すなわち咸亨と見なしうる。

（5）唐に「龍翔」の年號はないので、「翔」は形の近い朔の誤り、すなわち龍朔であろう。

（6）唐の「永淳」は唐の高宗の年號（六八二・六八三）であるが、二年（十二月に弘道に改元）までであるので、「四」は誤り。

（7）「藥琉璃光七佛本願功德景」は「藥師琉璃光七佛本願功德經」の誤り。唐の義淨が翻譯したので「新譯」を冠す。『大正新修大藏經』經集部卷一四所收。

（8）「步先生送某生游北京韻」の「步」は、唱和詩の一形式で、原唱（唱和するもとの詩）の韻字を用いるもの、すなわち次韻。この詩の原唱は、前注（1）に示した狩野直喜の「送岡崎學士遊支那」二首である。韻字に圈點を附して『君山詩草』から原唱を錄しておく。其の一「恤鄰長策竟如何、隻手難回滄海波。蔓草寒煙清廟闕、驚沙落日漢山河。薊門孤客愁聞笛、燕市羣兒笑負戈。休向瀛臺訪遺事、光宣朝士已無多（鄰を恤む　長策竟に如何ん、隻手　回し難し滄海の波。蔓草　寒煙　清の廟闕、驚沙　落日　漢の山河。薊門の孤客は笛を聞くを愁ひ、燕市の羣兒は戈を負ふを笑ふ。瀛臺に向ひて遺事を訪ふを休めよ、光宣の朝士　已に多きこと無し）」。其の二「十年志業讀書棨、喜汝觀摩在此行。禹域山川餘涕淚、堯封風雨長參榛荊。須徵文獻溯三古、便討經師到二京。別有民生念尤切、如今南北未銷兵（十年の志業　讀書の棨、汝の觀摩　此の行に在るを喜ぶ。禹域の山川　涕淚を餘し、堯封の風雨　長く榛荊に參ず。須らく文獻に徵して三古に溯るべし、便ち經師を討ねて二京に到る。別に民生の念ひ尤も切なる有り、如今　南北　未だ兵銷えず）」。

（9）「換日琴書」は、夏日に蓮の花を詠じた南宋の姜夔「惜紅衣」詞の「琴書換日（琴書もて日を換ふ）」の句に基づき、一日また一日を彈琴讀書して過ごす文人生活をいう。

（10）「廣武紛爭今楚漢」句の「廣武」は、項羽と劉邦が對戰した山（河南省滎陽市東北）。この句は、抗日戰爭や國共の抗爭が行われていた民國二十年代前半の現況をいう。

（11）「明時」は、公明正大な政治による太平の時代をいう。民國以後、紛爭が續く時代を生きる董康が、青年官僚時代を過ごした清末に愛着を懷いていたがゆえの語であろう。「彈事」は彈劾の事案をいうが、ここでは下の自注にあるように刑部の死刑審理を指す。

（12）「投荒」は、僻遠の地に流罪されるという意味であるが、ここでは董康の日本滯在をいう。紛爭止まない時期に日本に避暑に來たことを疚しく思っての措辭であろう。

（13）「西曹」は行政組織の刑部を指す。董康は清末に刑部の官員であった。この自注は、本書卷七・一月十五日條に狩野直喜が董康に清代の刑部における死刑審理のことを教えられ、それが狩野にとって「創聞（聞き始め）」であったということを指す。

（14）「枕戈」は兵器を枕にして寢ること。敵を殺して仇に報いる意味に用いる。

（15）「金輪」は唐の女帝、則天武后の號。『舊唐書』（卷六）則天皇后紀の長壽二年九月に「上（則天武后）金輪聖神皇帝の號を加ふ」とある。

（16）これは『舊唐書』（卷一九九）日本傳の「長安三年、其大臣朝臣眞人來貢方物。朝臣眞人者猶中國戶部尚書。……眞人好讀經史、解屬文、容止溫雅。則天宴之於麟德殿、授司膳卿、放還本國（長安三年、其の大臣の朝臣眞人來りて方物を貢ぐ。朝臣眞人は猶ほ中國の戶部尚書のごとし。……眞人は好みて經史を讀み、屬文を解し、容止は溫雅なり。則天、之を麟德殿に宴し、司膳卿を授け、本國に放還す）」の拔粹である。

（17）「禿管伴疏檠」の「禿管」は、使い古して毛が痛んだ筆。「疏檠」は、わびしい燈火。「檠」は燈燭の臺の意味から轉じて燈火の意に用いる。清の姚燮「一萼紅（恁凄清）」詞に「誰伴禿管疏檠（誰か禿管疏檠に伴ふ）」という類似の表現がある。

（18）「敢託乘桴慨不行」の句は、『論語』公冶長の「子曰はく、道、行はれず。桴に乘り海に浮ばん」に基づく。

（19）「頒洞」は水の勢いが激しく沸き立つ樣。ここでは激しく動搖する樣子をいう。

（20）「底柱」は黃河の三門峽の激流中に屹立していた山の名。また砥柱ともいう。「中流底柱」という語があって、堅固强力に支持する人などを喩えるが、ここでは動詞の意味に用いる。

（21）「班荊」は、友人どうしが會して共に坐して語りあうこと。『左傳』襄公二十六年に、友人の閒柄の楚の伍擧と蔡の聲子がそれぞれ晉に赴く途中、鄭の郊外で出會い、「荊（雜草）を班（し）きて相與（とも）に食して復故を言ふ」と記されたことに基づく語。

（22）「毘陵」は常州の古名、董康の故鄕。

（23）「天下名士有部落、龔定盦常州高材篇句也」の「龔定盦」は、清の詩人の龔自珍。「天下名士有部落」は、彼の『定盦餘集（定盦文集補古今體詩卷下）』中の「常州高材篇送丁若士」詩の第四句である。

（24）「陽湖派」は、陽湖縣（江蘇省常州市）出身の惲敬と張惠言などを代表とする駢文の要素を採り入れた清代の古文の一派をいう。陽湖は董康の出身地の武進と同じく常州府に屬す縣であった。

（25）「虎觀」は、後漢の宮殿の白虎觀の略稱。ここで儒學が講論された。中國哲學も專門とした狩野直喜の一門を喩える。

（26）「先生專精公羊」は、狩野直喜が公羊學に精通していたことをいう。その研究は、歿後に狩野直禎氏によって編集された『春秋研究』（みすず書房、一九九四年一一月）に見ることができる。本書卷七・一月十三日條にも「狩野は公羊家の言に精し」とある。

## 十二日

最近の新聞に上海航路の船便がたびたび變更されると載っていた。先にもともと十六日の長崎丸に乘船することを決めていたが、ドックに入っての修理のため延期になった。上海丸に變え十五日にすることにし、小林に賴んで神戶の郵船會社に電話してもらい船室を取ろうとしたが、何とその日の上海丸と十九日の長崎丸がいずれも滿員であった。私は北京大學の講義がすでに始まっているので、明日の秩父丸に變えることにした。しかし玉姬はまだ遊び足りない氣持ちであり、その上に小林夫人の義枝の篤い情誼もあって、とても心苦しかった。私は、以前、京都に寄寓していたが、比叡と琵琶湖には足を延ばしていなかったので、小林が車を雇ってくれ遊びに出た。山中の木々は綠が深く、曲がりくねった道を進み滋賀峠（山中越）に着き、小林が私た

ちの寫眞を撮った。山を下って湖沿いに車が走行すると、水は澄んでおり、大坂へと續く。風景は、西湖に比べると甚だ見劣りがする。三井寺に行く。寺は如意輪觀音をまつり、良辯僧正が開山。また石山寺に行く。寺には巨石が多くあり、それで名づけられた。聞くところによると、宋版が多數あるとのことであるが、殘念にも見る時間が無かった。本殿にはまた觀世音がまつられ、本殿左端に小さな部屋があり、「紫式部源氏の部屋」と題されていた。紫式部が和學と關係があるので、國民は今もこのように崇敬している。ついで王子（皇子山）から京都に歸り、小林が一休庵に招待してくれ精進料理を食べる。前年、心如（陶洙）とここに來たことがある。部屋には佛像が安置され、傍らに木魚が置かれ、これを叩くと仲居がすぐにやってくる。これも王褒の「僮約」[1]を補えることである。別莊に戻り、長文が寫眞を屆けてくれた。そのうち玉姫の和服姿のものは本人の表情がとてもよく出ていた。この日、田中の手紙を受け取った。心如の立て替え代金千圓を〔田中に〕送るので、小林に賴んで明日、郵送してもらう。また孫伯醇の手紙も受け取るが、パスポートが一枚同封されていた。

滿庭芳[2]　題玉姫和裝小影　　滿庭芳　玉姫の和裝の小影に題す

碧玉家門[3]　　碧玉の家門
秋娘[4]年紀　　秋娘の年紀
依然霧鬢煙鬟。　　依然として霧鬢煙鬟
入時妝束　　入りし時の妝束
休認步邯鄲。[5]　　歩の邯鄲なるを認むるを休めよ
臨鏡試評邢尹[6]　　鏡に臨み試みに邢尹を評すれば
驀消得、腰褪裙寬。[7]　　驀に消得せんや　腰褪し裙寬きに
須防者　　須らく防ぐべき者は
有人忍俊　　人の忍俊して
屏角恣偸看。　　屏角に恣に偸み看る有り
長安。　　長安
何處是　　何れの處か是れなる
霓裳[8]遺製　　霓裳の遺製
尚在人閒。　　尚ほ人閒に在り
更春花秋葉　　更に春花秋葉
點染多般。　　點染すること多般
寫出玲瓏[9]瘦影　　寫し出だす玲瓏たる瘦影
心頭事、常露眉彎。　　心頭の事　常に眉彎に露る
雙袖薄　　雙袖　薄く
修篁倚處　　修篁　倚る處
向晚可禁寒。　　晚に向として寒きに禁ふ可けんや

滿庭芳　玉姫の和服姿の小さな寫眞に書き付ける

〔玉姫は〕美女の家柄に生まれ、唐の秋娘と同じ年頃で、〔和服を着ても〕相變わらず霧や靄のような豊かでふわりとした鬢と鬟が見事である。着替えが整い入ってきた時、邯鄲の歩みさながらのぎこちなさに目を留めないでやって欲しい。鏡を前にして試みに鏡の中の姿を見比べると、腰回りが細くなりスカートが緩くなることに〔玉姫は〕急に耐えられるであろうか。防ぐべきは、笑いをこらえ、屏風の隅で好

き勝手に盗み見をする輩である。

〔霓裳羽衣にゆかりある唐の〕長安は、どの邊りになるであろう。昔の神仙の衣裳の作り方をした衣服が、今でもこの世に〔和服として〕存在していた。さらに春の花や秋草の模様を、様々に染め上げ美しい。寫眞には一人きりでほっそりとした〔玉姫の〕姿が寫っており、心のうちの事どもがいつも通り眉に現れている。兩袖が薄いので、高く伸びた竹に寄りかかっていると、暮れゆく頃には寒さが辛抱できまい。

（1）「僮約」は、前漢の王褒が奴婢の契約を記した文章。ここでは使用人に關する文書の意味。
（2）「滿庭芳」は、雙調九十五字、前段四十八字十句四平韻、後段四十七字十一句五平韻の形式をとる詞である。
（3）「碧玉」は美貌の若い女性、妾の意。南朝の樂府「碧玉歌三首」其の二に「碧玉小家女、不敢攀貴德（碧玉は小家の女、敢へて貴德に攀ぢず）」とある。南宋の郭茂倩『樂府詩集』卷四五の「碧玉歌」の解題に引く『樂苑』に「碧玉歌は宋の汝南王の作る所なり。碧玉は汝南王の妾」という。
（4）「秋娘」は唐代の歌妓の名。また中唐の時代、節度使の李錡に杜秋娘という妾がいた。ここでは董康の妾であった玉姫を喩える。
（5）「步邯鄲」は、『莊子』秋水篇に見える「學步邯鄲」の故事。人のまねに失敗し、かえって自分本來のよさを失くすことを意味する。ここでは玉姫が日本人の摸倣をして和服を着て、ぎこちなく歩いたことをいうと思われる。
（6）「邢尹」は前漢の武帝が同時期に寵愛した邢夫人と尹夫人。ここでは玉姫と鏡に映った玉姫の姿を指す。
（7）「腰褪裙寬」は、和服の帶を締めたのでいつも以上に腰が細く見え、これから着るスカートの腰回りが緩くなると想像したのであろう。
（8）「霓裳」は神仙の着る裳。『楚辭』の「九歌・東君」に「青雲の衣　白霓の裳」とあり、後漢の王逸の注に「言ふこころは日神來り下り、青雲を上衣と爲し、白霓を下裳と爲す」という。また唐の玄宗が月宮で覺えて歸って作ったとされる舞曲に「霓裳羽衣曲」というものがある。
（9）「玲瓏」は一人きりの樣子。

**十三日**

晴れ。九時頃、京都驛を出發する。小林夫婦と次男の勝政および政子が神戸まで見送ってくれ、乘船。政子が田中から送付の品が屆くの待つため、二日延期する。私の船室は二〇五になり、十二時に出航。小林が繫留場で遠くから寫眞を撮り、玉姫と見送りの人達がハンカチを振って挨拶をし、悲しみにくれる。晩餐のあと、船長が活動寫眞で船客を樂しませる。その中の風景の場面には今回訪れたところが多くあった。

**十四日**

穩やかに航行。晩に玉姫を連れてダンスホールに行きダンスを見る。

**十五日**

十時ばかりの頃、揚子江に入り、十二時に上海に到着し、匯山埠頭に停泊。小姨の雲娟が全寶と弟の少卿、甥の景熙を連れて波止場に出迎えてくれる。稅關の檢査を受けてから歸宅。

書舶庸譚卷九終

（立命館大學文學部教授）